

内海愛子編／解説

『村井宇野子の朝鮮・清国紀行』

——日露戦争後の東アジアを行く

1906（明治39）年

4月14日～6月16日』



紹介者：川田 恭子

このタイトルを見て、まず思うことは「村井宇野子」とはだれだろう？ ではないだろうか。彼女はたばこ王と称された村井吉兵衛の妻で、1870（明治3）年京都生まれ。明治・大正という近代日本経済の黎明期に青春をすごした女性である。では、なぜ彼女の旅行記が残り、それが出版というかたちで現在によみがえったのか。それは、日露戦争直後の朝鮮半島、清国を旅した体験を、平凡であるがゆえに稀有なまなざしで見つめた素直な日記を残したゆえである。

宇野子と吉兵衛——国に生業を奪われた夫妻

本書の内容に入る前に、村井宇野子と夫・吉兵衛について紹介しておきたい。村井宇野子は京都・下京区で中谷平兵衛の長女として生を受けた。本書の解説によると、8歳で馬町修道小学校に入学、課程修了後は菅原ゑい子塾に通い、15歳で村井の家の縁女となっている。縁女とは、息子の将来の結婚相手として入籍させる制度で、宇野子の場合、一度村井の家の戸籍に入ったあと、改めて1885年（明治10）年10月10日に夫・村井吉兵衛と婚姻届けを提出している。じつは、吉兵衛も9歳で叔父夫妻の養

子となっており、宇野子が縁女となったのも叔父の家である。

ともあれ、21歳の吉兵衛と15歳の宇野子が結婚し、ともに家業であるたばこ商として事業に邁進していくことになる。吉兵衛の叔父は、古くからの葉たばこの産地、石川県鶴来出身の加賀屋吉兵衛と称する京都のたばこ商だった。二人の結婚後に吉兵衛の名を甥に譲り、以後、吉右衛門と称している。吉兵衛は、養父である叔父から商いのいろはを学びながら、家業を継いだのちは開通したばかりの鉄道を乗り継ぎ、東京から北海道まで日本全国をまわって商いを拡大していった。

吉兵衛の事業の成功は、紙巻きの加香たばこ「サンライス」を売りだしたことによる。1891（明治24）年発売した「サンライス」は箱や売り方にも工夫し、好評を博した。本書解説によると、1893年シカゴ万博に参加するために渡米した際、「吉兵衛は、パスポートと、「サンライス」で稼いだ2万円を懐に、神戸からサンフランシスコ行きの船に乗った」（p.99）とある。当時の2万円は現在の貨幣価値で3000万円弱であると考えれば、サンライスの売れ行きは想像できるだろう。

その後、アメリカ産の葉をブレンドした「ヒーロー」（1894年発売）をはじめ、ピンヘッド、オールドなど多くの紙巻きたばこを開発、販売し、東京に本社を移転する。「ヒーロー」発売と同じ1894年には合名会社村井兄弟商會を設立し（1899年に株式会社化）、近代会社組織としてたばこの製造販売を展開していく。

しかし、時代は日清戦争、日露戦争と国費負担の増大を抱え動いていた。日清戦争（1894～95年）後の国家財政補助のために葉煙草専売法が1898年に施行され、日露戦争（1904～05年）時の税収確保のために煙草専売法が1904（明治37）年に制定された。結果、吉兵

衛はその半生をかけて育て上げた事業を多額の賠償金と引き換えに国に奪われたのである。

吉兵衛と宇野子が朝鮮半島と清国へ旅をしたのは、専売法施行から2年後のことである。専売は突然行われた政策ではなく、長い時間をかけて段階的に施行され、全国のたばこ商との討議も行われていた。つまり、吉兵衛はたばこ業後の再出発を考えていたはずである。この旅行はたんなる観光ではなく、新たな事業の展開・拡大のための旅でもあったのだろう。吉兵衛は、専売法施行から半年後の1905（明治38）年1月に合名会社村井銀行を創立し、銀行事業を主軸に国内で鉱山運営、朝鮮半島で農場の経営、台湾で造林所の経営など多角経営に着手する。1906（明治39）年の旅の目的の一つには、こうした新事業展開の布石があった。

宇野子が見た朝鮮半島・清国

とはいえ、吉兵衛の思惑とは無縁のところには宇野子はいた。本書解説によると、彼女は「朝鮮半島東南の釜山港に上陸すると、農場予定地の慶尚南道進永へ移動し、その後は列車で首都漢城（別称京城）を訪問、さらに北上して鴨緑江を渡り清国へ入国している。安東からは軍用軽便鉄道に乗って奉天、鉄嶺まで足をのばし、そこから南下して遼東半島の旅順、大連に赴いている。新たな日本の版図を巡りながら、宇野子は目に入った車窓の風景から日露戦争に関するエピソードなどを細かく書き留めている」（pp.87-88）とある。

本書の裏表紙には彼女たちがたどった旅路の地図がでていますが、東京・新橋駅から下関にて船で釜山に渡り、黄海と渤海をぐるりとまわるルートで上海から長崎に帰る旅路は、実に長い。敷かれてまもない鉄道を使いながら、よく移動したものである。

この旅路を宇野子は筆まめに記録している。

たとえば、朝鮮王朝時代からの首都漢城では「農商工部大臣陸軍副将権重顕氏を訪問いたしました。応接の室とおぼしきは、おおよそ八畳敷（原文ママ）くらいの広さにて、ここには衛兵にや四五人酒を飲んでおりました。私どもは奥まりたる大臣の居間に案内せられました。部屋の広さは六畳よりは狭く四畳半よりは広く、温突の上に敷物を敷き、端の方には巾狭く細長き唐繻子の薄い布団が……」（pp.26-27）といった具合である。権重顕は、1905年の第二次日韓協約に賛成した五人の大臣の一人であるが、彼の屋敷に訪問した際の記述は、部屋の広さや調度についてじつに細かく記述している。

宇野子はこの調子で、平壤では「市の形は東西に狭く南北に長く、そのうえ北方が高く南方が低く、ちょうど舟のようであります」（p.30）と表現し、奉天にある北陵へ参ったときには「壮大なる御廟ではありますが、気の毒なことには、日露戦争の戦場となりしたため、大砲の弾痕を所どころに留めて いたく破損しております。内部は黄金色の壁なるに萌黄色の陶器の龍など張りつけ、天井より柱にいたるまで極彩色にて誠に美しゅうございます」（p.44）と語っている。こうした宇野子が見たそのままを素直に詳述した日記は、こなれた表現ではないがゆえに、当時の状況をまざまざと思い起こさせてくれる。

また、日記には風物だけでなく移動する先々で出会った人物の名前がよく登場する。京釜鉄道に乗り三浪津で山根鉄道監に会い、漢城で権大臣に会い、安東に入ったところで、巖知宗、范源廉という清国人と同道し、本溪湖で隠密の西園寺公望一行に「ちょっとあいさつ」する。こうした人々に、異国の地で会った意味は、内海の解説がひも解いてくれる。詳細は本書を読んでももらいたいが、ともに軍隊の許可を得なければ乗れなかった軍用軽便鉄道に乗って旅した

巖知宗、范源廉は、日本に留学し、のちに清国の女子教育の礎を築いた教育者であった。日記にでてくる人々は、吉兵衛が事業のために会いに行った人物もいれば、偶然出会った人もいる。さらりと書かれた人名を探っていくと、なぜこの時代、この土地にいたのかがわかり、朝鮮半島の近代史をひも解く道しるべとなっている。この点は、内海氏の解説にくわしいので、ぜひご一読いただきたい。

近代東アジアを照射した旅日記

本書の構成は、宇野子が残した日記の書き起こしとなる旅行記の第一部、内海愛子解説の第二部、そして元国鉄労組の奥田豊己の鉄道に関するコラムの三部作となっている。旅行記は前述のとおり。内海の解説は、宇野子の旅路とともにたどりつつ、日露戦争直後という独特な時代性の解説と、土地がもつ歴史性、そしてなぜその瞬間に朝鮮半島・清国でその人に会ったのかを解説してくれる。まさに、一女性の旅行記

を現在に復刊する意味を伝えている。奥田は宇野子らが乗車した京釜鉄道、嶺南鉄道、安奉鉄道などの路線に注目し、その意味を解説している。実際に蒸気機関車を動かしていた奥田ならではの解説となっている。奥田が鉄道網を解説したことで実現した、ページの上に鉄道の路線と立ち寄った駅名がデザインされているのも楽しい。

素朴で素直な女性によるまなざしにふれながら、近代東アジアの歴史や鉄道の変遷をたどれる旅行記である本書は、歴史研究者だけでなく、女性、鉄道、人間に興味をもつすべての人が楽しめる一冊である。

(内海愛子編／解説『村井宇野子の朝鮮・清国紀行——日露戦争後の東アジアを行く 1906(明治39)年4月14日～6月16日』梨の木社、2021年11月、174頁、定価1,980円(税込))
(かわた・きょうこ 法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員)